

2024年2月17日

## 『続 羊の歌』 講読会

### 「第二の出発」②

立命館大学 先端総合学術研究科  
西澤忠志

#### 書誌情報

『朝日ジャーナル』9巻33号（1967年8月6日）：74-78頁  
旧版（1968）：45-55頁、新版（2014）：51-62頁

#### 本章の梗概

1951年11月に日本を出発し、フランスに滞在した最初の一年での体験を綴る。フランス到着直後に逗留した日本館を中心に、加藤は日本人留学生だけでなく、欧米の様々な人と出会った。特に「ブルターニュの青年」やパリの街並みとの出会いは、言葉と文化との関係などの概念の日本と西洋との違いを強く意識させるきっかけとなった。この時点で得た問題意識は、後年の「雑種文化」、『日本文学史序説』などの著作に結実することとなる。

#### ・この章の全体の中での位置づけ

フランスに滞在した時期を取り上げた章（「別れ」まで）の中でも最初期に当たる  
「第二の出発」…フランス留学中の「日本館」での同世代の人々との会話を中心

「詩人の家」…フランス留学中の「ルネ・アルコスの家」でのアルコスと彼の娘との会話を中心

#### 凡例

#### ・段落ごとに内容をまとめる際に、以下の段階を踏む

- ① 作品内世界での出来事の実証
- ② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造
- ③ 加藤周一の人生における意義

#### ・以下の記号を、この意味で使用する

□ …発表者による補足

【】 …『朝日ジャーナル』版のみに書かれた記述

## 各段落のまとめ

第5段落（旧版 48-50 頁、新版 55-56 頁）

しかしブルターニュの青年とのつき合いから私が出たのは、議論をする習慣だけではなかった。私はフランス語を話しはじめると同時に、フランス語の文章を私がそれまで読んでいなかったということも発見した。彼はヴァレリーが対話体で書いた『ユーパリオス』を、私のために注意深く読んでくれた。何故著者がその場所にその語を用いて他の語を用いなかったか、何故その言廻しを採って他の言廻しを採らなかったか。そういう議論に、仏和辞典はほとんど全く役に立たない。嘗て私は東京で、仏和辞典を用い、英訳を参照し、その本をかなり丁寧に読んで、理解したつもりでいたが、私が理解していたのは、すじ書きにすぎなかった。私は東京で、ヴァレリーを読んで理解することはできるが、フランス語で話をするにはむずかしい、と思っていた。パリの大学町では、フランス語で話をするには大してむずかしくないだろうが、ヴァレリーを読むのは容易でない、と考えるようになったのである。日本について、彼はしばしば一つの質問をくり返した、「日本語の文章にも、フランス語の場合と同じ意味で文体と称すべきものがあるのか」-「全く同じ意味では、ないかもしれぬ、しかしそれに該当するものがある」という答えは、彼を満足させなかった。日本語における文体の概念をどう定義することができるか、という面倒な話が、そこからはじまらざるをえなかった。彼の仲間の中には、小説を書き始めている青年もいたが、彼自身は、十分に満足できる文章を書くことができるようになるまで、拙い文章で創作を試みる気はない、といていた。そういう彼の態度は、私にしばしば私自身の二〇歳前後を思い出させた。おそらく私ははるかに広くロシアの小説家やフランスの詩人やドイツの哲学者を知っていたと思う。しかしフランスの青年が母国語とその古典にむすばれているほど確かな絆で、日本語とその古典にむすばれてはいなかったろう。私の文学的教養は、国際的に横に拡って浅く、彼の教養は自国の歴史を縦に通して、深かった。私はそういう対照から強い印象を受けた。はるか後になって、『雑種文化』という文章を書き、日本の状況に潜在している可能性を強調したときに、私は大学町でのその経験を思い出していた。私は横に幅広い教養を「雑種」とよび、縦に深い教養を「純粹種」と名づけ、現代の日本人にとってはもはやその二つの型のどちらかを選択する自由はなく、したがって「雑種」の型に積極的な意味を見出すほかはない、と論じたのである。

### ① 作品内世界での出来事の実事考証

#### ● 『ユーパリオス』…ヴァレリーによって 1921 年に出版された『エウパリオス』

ソクラテスとその弟子（パイドロス）との建築家エウパリオスをめぐる対話を通して、芸術と哲学とのつながりについて語る

#### ● 「嘗て私は東京で、仏和辞典を用い、英訳を参照し、その本をかなり丁寧に読んで、理解したつもりでいた」 ・一高生時代に、中村真一郎などと一緒に輪読する

「加藤周一さんも中村真一郎さんと一緒に十六年の夏、旧軽井沢の辰雄を訪ねて来た一人で、その頃はまだ大学生だった。（……）はつきり思い出せないが、福永（武彦）さんや野村（英夫）さんも加わってヴァレリーの『ユーパリオス』を輪読するのを、私もそばで聞いていた記憶がある。<sup>1</sup>」

<sup>1</sup> 堀多恵子『堀辰雄の周辺』角川書店（1996）181 頁

・フランス滞在中に使っていたと考えられる、タイプ印刷された『エウパリノス』が現存<sup>2</sup>

→読んでいたのは確か

## ② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

### ● 渡仏前後での加藤のヴァレリー読解の変化

・渡仏前の加藤…「私は東京で、ヴァレリーを読んで理解することはできるが、フランス語で話をするとはむしろかしい、と思っていた。」

→辞書をもとに、書いてあることの意味を理解する⇔日常会話

・渡仏後の加藤…「パリの大学町では、フランス語で話をするとは大してむしろかしくないだろうが、ヴァレリーを読むのは容易でない、と考えるようになったのである。」

→フランスでの文脈に沿って「精読」すること⇔日常会話

(フランス語特有の文脈を知っていないと、理解することが不可能)

### ● 「文体」に関する加藤と「ブルターニュの青年」との会話

「ブルターニュの青年」…「日本語の文章にも、フランス語の場合と同じ意味で文体と称すべきものがあるのか」

・ヨーロッパでの「文体」…古代ギリシャ～中世→修辞学（レトリック）と作品主題とジャンルが対応

ロマニズム以降→作家の個性の数に応じて多種多様であるという独創性が強調<sup>3</sup>

フランス文学での文体論（1967年時点での理解）<sup>4</sup>…「フランス語の表現価値や表現効果を探求」

「作品の独創性を重んじ、その固有の言語的特質から作品にアプローチ」

・加藤「全く同じ意味では、ないかもしれぬ、しかしそれに該当するものがある」

→日本語にも「文体（style）」があるかどうか

※渡仏前にも「文体」への関心はある

例：「文体論」『文芸』（1948）掲載

ヨーロッパ近代の散文は、社会的論理的なラテンの文体と孤独な情念の表現であるゲルマンの文体との両極端を含むが、何れも日本の散文の歴史には缺けてゐた要素である。しかし、問題は文体にとどまらず、散文の形式は精神の形式に他ならないから、一般に精神生活の構造に係り、嗜好の方法と感受性の性質とに係はるであらう。ラテン諸国殊にフランスの社会と幾何学的精神、ドイツ人の孤独と観念論哲学を産んだ神秘主義的体験、——それぞれの文体は、それらの前提の上にものみ可能であり、それらの前提を離れて文体のみを所有することはできない<sup>5</sup>。

→文体と地域の「精神構造」との関係に注目

<sup>2</sup> 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』岩波書店（2018）354頁

<sup>3</sup> 中山眞彦「文体」『デジタル版 集英社世界文学大事典』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2024-01-19)

<sup>4</sup> 田島宏「(1) 文体論：(第2部: 文学と言語学の接点) フランス語研究の問題と方法」『フランス語フランス文学研究』11巻（1967）110頁

<sup>5</sup> 加藤周一「文体論」『文芸評論代表選集 昭和25年度版』中央公論社（1950）33頁（初出：『文芸』23号）

例：ヨーロッパの文体をゲルマン的（北歐的）とラテン的（地中海的）に分類<sup>6</sup>、その中での文体の歴史的なつながりを見る

→日本については、平安時代から江戸時代にかけての文学をもとに「和文脈」、「漢文脈」、「口語文」に分類<sup>7</sup>

しかし、日本の「文体」とは何かについては言及無し、特徴を数点挙げるだけ e.g., 人称の省略、時間の表現

⇒文体は地域ごとに異なることを意識した上で、「ブルターニュの青年」にした発言か

● 「小説を書き始めている青年」と「二十歳前後の」加藤周一との対比

・「フランスの青年」（「ブルターニュの学生」、「小説を書こうとしていた学生」）…自国（フランス）の歴史に縦につながっている

・「二十歳前後の」加藤周一…『向陵時報』『校友会雑誌』『しらゆふ』『崖』で彼の身边で起きたことを中心とする私小説を発表

→加藤が20代に書いた小説が、古典文学とのつながりが薄いことへの反省？<sup>8</sup>

「美しい文体」を書いた作家は日本文学の古い伝統に学んでいることも既に意識<sup>9</sup>

→加藤が当時、気になっていた点（外国で『日本文学史序説』の元となる日本文学史を講義）に関心を持つきっかけとして、記述？

### ③ 加藤周一の人生における意義

・日本語の「文体」への興味…小説以外にも拡大、「文学史」の一部に

例：福沢諭吉と中江兆民の文章

福沢は見事な口語文を書いた。（……）兆民は文章においてしばしば漢文を用い（『民権訳解』『三酔人経綸問答』1887、など）日本文で書くときにも漢語を駆使するのを憚らなかつた。伝統的文化に対しては、福沢の態度の方が、兆民のそれよりも、徹底して革新的であったといえる<sup>10</sup>。

→文章（文体）から、その人の文化に対する態度を明らかにする。

● 「雑種文化」を著すきっかけの一つ

例：「雑種文化」の前提にある問題意識

・英仏の場合は、その国の特色が学問、芸術から服装、生活様式の末端まで及び、かつ長い歴史に負っている。

⇔

・医学や美術は外国式で生活様式は日本<sup>11</sup>

<sup>6</sup> 加藤周一「文体論」『文芸評論代表選集 昭和25年度版』中央公論社（1950）37頁

<sup>7</sup> 加藤周一「文体論」『文芸評論代表選集 昭和25年度版』中央公論社（1950）34頁

<sup>8</sup> こうした加藤の小説に対する背景となる「骨格」の不在は、同時代の評論家にも指摘されている。「加藤君の小説を一つ読んだが、なかなか気どったスタイルで甘い抒情詩を小説の形に置きかえたような、スタイルだけで骨格のない感じだった。」

栗林農夫；久保田正文、岡本潤、壺井繁治、秋山清「詩の言葉の美しさについて(座談會)」『コスモス』10号20頁（1948）

<sup>9</sup> 加藤周一「文体論」『文芸評論代表選集 昭和25年度版』中央公論社（1950）36頁

<sup>10</sup> 加藤周一『日本文学史序説 下』筑摩書房（1999）260頁

<sup>11</sup> 加藤周一「日本文化の雑種性」『加藤周一自選集2』（2009）4頁

第6段落 (旧版 50-52 頁、新版 57-59 頁)

大学町で、私はまた、米国の黒人画家とも知り合うようになった。彼女は私よりも背が高く、つり合いのとれた実に美しい身体をしていた。美術学校で油絵を描いていて、自作の絵をみせながら、これをどう思うか、将来絵を描いてゆくことに見込みがあると思うか、正直にいつてくれ、と私にいつた。「将来のことはわからぬ」と私は答えた、「この絵についていえば、これはまだできあがった品物ではない、素人の仕事にすぎない…。「それは自分でもわかっています」と彼女は素直にいつた。「しかしぼくはあなたの絵が好きだ」-たしかに私はその絵も好きだったが、それ以上に彼女を好きだった。私たちは展覧会をみにいつたあとで、その興奮のさめないまま、近所の喫茶店の椅子にかけ、ながい間絵や画家や米国やフランスのことを話していつた。アルマの広場を忙しそうに往来する人々を眺めながら、「米国へ帰りたくない」と彼女はいつたことがある。またあるときには、「パリでは皆が英語を話すから、フランス語を覚えられない」といつた。「冗談じゃない、これほど母国語に固執する国民は少いね」「だって今も英語で話しているじゃありませんか」。そうして私たちは意味もないのに声をそろえて笑つた。彼女は従兄だという黒人の青年も紹介した。またルーヴルで外国人の案内係をして暮していつたドイツ人の画家を連れてきたこともある。彼らはあるとき、もうひとりの若い米国人を伴い、「日本館」の私のところまで押しかけてきた。「あなたに聞きたいことがあるというので、連れてきました」と彼女はいつた。その米国人の質問は、あまりにも意表に出ていつたので、私ははじめ彼が冗談をいつているのではないかと思つた。しかし彼は、大真面目だつた。「人生にとって宗教は一信仰はといつてもよいが、どうしても必要なものであるかどうか」「一般にはいえないだろう」と私は答えた。「私自身にとって……」と彼はいつた。「人によるでしょう」と私はくり返すほかはなかつた。「どういう人には、必要だと思いつますか」「一寸待つた、必要かどうかという質問そのものに、意味がないかもしれない」と私はいつた、「必要だと答えても、だから信仰をもつというわけにはゆかない。必要でないと答えても、信仰する人は信仰するでしょう」。機械技師だというその米国人は、黙つて熱心に聞いていつた、私は話題を変えることにした。「信仰はたとえば恋愛のようなものだ。誰かに惚れることが必要だからといつて、惚れられるものではない。惚れる必要がなくとも惚れるときには惚れるわけだ……」「恋愛とは何だろうか、今その問題を考えているところです」と彼はいつた。ドイツ人の画家は、にやりとして、独言のように眩いつた、「今どき恋愛とは何かという問いを発することのできる国民は、米国人のほかにはないだろうね」-しかし米国人技師は恋愛には三つの型があると思う、と説明しはじめていつた。第一の型は精神的な恋愛である、第二の型は肉体的な恋愛である、第三の型は混合型である、第一の型はいつたは易く行つたは難い、第二の型はよろしくない故に第三の型は……パリの米国人たちは、殊にこの技師は、どこか遠い星から降つてきた人間のようにみえた。思いもかけぬほど善良で、思いもかけぬところで冗談をいつた、思いもかけぬところで全く冗談を解さなかつた。そして彼らは私の友だちになつた。はるか後になつて、私が米国で彼らに会つたとき、そのひとり、米国社会の不正を呪つていつたし、もうひとり、ニューヨークのなかにパリと共通の要素を見出して満足していつた。またもうひとり、米国社会のなかで申し分なく周囲と調和して、少しも不思議な存在ではなくなつていつた。そしてその誰もが、友情に厚く、旅人の私を遇するのにな親切の限りをつくしてくれたのである。

① 作品内世界での出来事の実事考証

- 「米国の黒人画家」…モーゼル (Mozelle) <sup>12</sup>
  - 「黒人の青年」、「ドイツ人の画家」、「若い米国人=米国人の機械技師」…不明  
・しかし、同様の会話が行われたのは、ほぼ同時代の加藤の文章にも出てくる<sup>13</sup>
- 例：加藤周一「フランス人の真面目不真面目について」『巴里』(1955) <sup>14</sup>。

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

- 「若い米国人」による質問

若い米国人「人生にとって宗教（信仰）は、どうしても必要なものであるかどうか」

加藤「一般にはいえないだろう」「人によるでしょう」

若い米国人「どういう人には、必要だと思いますか」

加藤「一寸待った、必要かどうかという質問そのものに、意味がないかもしれない」「必要だと答えても、だから信仰をもつというわけにはゆかない。必要でないと答えても、信仰する人は信仰するでしょう」「信仰はたとえば恋愛のようなものだ。誰かに惚れることが必要だからといって、惚れられるものではない。惚れる必要がなくても惚れるときには惚れるわけだ……」

若い米国人「恋愛とは何だろうか、今その問題を考えているところです」

ドイツ人の画家「今どき恋愛とは何かという問いを発することのできる国民は、米国人のほかにはないだろうね」

若い米国人「第一の型は精神的な恋愛である、第二の型は肉体的な恋愛である、第三の型は混合型である、第一の型はいうは易く行うは難い、第二の型はよろしくない故に第三の型は……」

→若い米国人…抽象的な問いや具体性に欠ける問いに終始

※同時期の加藤によるヴェトナム戦争批判に通じる部分？

<sup>12</sup> 「今は昔、一九五〇年の初め、私はイエナ広場の国立近代美術館で、「ルオー回顧展」をみて、その後アメリカ人の画家、モーゼル Mozelle とアルマ広場まで歩き、広場に面したカフェーのテラスで、みてきたばかりの展覧会の話をしたことがある。その頃のモーゼルはシカゴからきてパリで絵を描いていた。そのとき彼女と喋ったことを、パリ一三区の下宿で書きとめたのが、この小文である。アメリカには著作を人に捧げる習慣がある。私はまだどんな著作も彼女に捧げたことがない。今は亡きモーゼルの名を、私はこの文章のあとにぜひ誌しておきたいと思う。《to Mozelle. with Love》」

加藤周一「ルオーの芸術」『加藤周一自選集 1』(2009) 447 頁

<sup>13</sup> しかし、「ドイツ人の画家」ではなく、アメリカ人の「音楽家」と「英語の上手なフランス人」が出てくる。

<sup>14</sup> 「ある晩、その二人が自分たちの他に別のアメリカの青年と（……）英語の上手なフランス人をつれてきたことがある。（……）新しくきたアメリカ人がよく喋ったが、彼だけがパリを通り過ぎる旅行者で、旅行の間に専門以外の人事百般に通じておこうという気組みの程が感じられた。彼はやたらに質問した。まずパリについて（……）また突然宗教について。（……）私が念入りにその青年を相手にしたのは、彼がいかにも真面目で、ほんとうに何かを知ろうとしていることがよくわかり、そのことに一種の好意をもったからである。しかし恋愛とは何かときたときにはさすがにやれやれという感じがした。私だけでなく他の二人のアメリカ人もそういう表情であった。そのときフランス人が、こういったのである、アメリカ人は恋愛とは何かということを知らない歴史上最初の国民だろうと。むろん駄洒落だが、その場ではよくできた駄洒落で、いかにもフランス人がいいようなことである」

加藤周一「フランス人の真面目不真面目について」『巴里』(1955) 74 頁

例：「ベトナムと禅と安保について」『世界』258号（1967）<sup>15</sup>…アメリカのヴェトナムへの介入の根拠が  
具体性に欠けることへの批判

→加藤とアメリカ人との問題意識の違いを実感…「パリの米国人たちは、殊にこの技師は、どこか遠い星から降  
ってきた人間のようにみえた。思いもかけぬほど善良で、思いもかけぬところで冗談をいい、思いもかけぬと  
ころで全く冗談を解さなかった。」

● 「そのひとり①、…もうひとり②、…また、もうひとり③…」…書かれた時代（1967年）のアメリカと比較  
した場合

① 「米国社会の不正を呪う」を「米国の黒人画家」とした場合  
・公民権運動か？

② 「ニューヨークのなかにパリと共通の要素を見出して満足していた」を「ドイツ人の画家」とした場合  
・（加藤と同じく）アメリカ人ではない第三者の人々？

例：加藤周一「あめりか印象記」『エコノミスト』（1962）<sup>16</sup>

※「あめりか・一九六二」『海辺の町にて：仮説と意見』（1964）に再録

③ 「米国社会のなかで申し分なく周囲と調和して、少しも不思議な存在ではなくなっていた」を「機械技師」  
とした場合

・当時のヴェトナム戦争を支持するアメリカ国民か？

---

<sup>15</sup> 米国が、まもるべき具体的な利益もなく、条約上の義務もない東南アジアの小国に、大群を送っているのは、  
米国人自身のいうところによれば、「共産主義者がベトナムで成功すれば、また次のところで侵略をはじめら  
ろう」からである。しかし「侵略をはじめる」のは、具体的にはどこかの共産主義政府であるほかない。（……）  
彼らがどれほど争っていても、どれほどちがう条件におかれていても、すべては、多にして一、一にして多なる  
普遍的な一般車「共産主義者」に期するのである。（……）悟りは仏法にいわゆる易行ではなくて、難行である。面  
壁九年。冷戦二十年。これをみだりに無明の衆生にもとめることはできない。しかしこの悟りをえなければ、ベ  
トナムのいくさのはっきりした目的を、理解することはむずかしいだろう。

加藤周一「ベトナムと禅と安保について」『世界』258号（1967）11頁

<sup>16</sup> 「たとえば、ろくに英語も知らぬ私のような一人の旅行者が、道楽に、サンフランシスコに二日、シカゴに  
二日、ニューヨークに二日と滞在したとすれば、そもそも東西のちがいはどの程度に感じられるものだろう  
か。（……）たとえば美術館の品物をなんでも手当たり次第に見物してよろこぶという奇妙な道楽であるとしよ  
う。（……）しかし、この大都市〔シカゴ〕に入れ代り立ち代りおもしろい展覧会があるというわけではない。  
そこが東京やロンドンとちがう。いわんやパリとちがう。その意味でパリに匹敵するのはニューヨークだけで  
ある。」 加藤周一「あめりか・一九六二」『海辺の町にて：仮説と意見』（1964）166頁

その頃のパリの在留邦人は少かった。大使館はまだ開かれず、その前身に相当する事務所に後の萩原大使が来ていた。長身瘦軀の萩原大使は、英仏語を自由に話し、芝居見物を好み、公務の余暇に文藝を談ずる風流を知っていた。また若くして日本を去りフランスに住みついて戦時中もその土地を離れなかった彫刻家高田博厚氏がいた。その高田氏に私の負うところは実に大きい、そのことについては後にいう機会があるだろう。パリはまた朝吹登水子さんに出会う機会もあたえてくれた。戦前パリで暮したことのある朝吹さんは、戦後誰よりも早くパリに戻って、詩人ルネ・アルコスの家の間借をして暮していた。私は「日本館」を出た後、彼女のあとを襲って、アルコス家に住んだのである。

① 作品内世界での出来事の事実考証

● 「萩原大使」…萩原徹（1906-1979）

東京出身。一高、東大を経て、1928年に外務省に入省。1950年に駐パリ在外事務所長、1952年に駐スイス公使、1957年に駐カナダ大使などを歴任<sup>17</sup>

※加藤との関係…森有正とともに交友を持つ、スイスやカナダに赴任後も加藤との交友は続く<sup>18</sup>

萩原徹を通して、他の日本人（朝吹登水子、石井好子）と出会う<sup>19</sup>

- 高田博厚（1900-1987）…彫刻家。石川県に生まれる。1918年上京して東京外国語学校イタリア語科に入学したが、21年中退、高村光太郎の勧めでゴンデビの『ミケランジェロ伝』の訳注を始め、このころから彫刻を制作。27年大調和展、ついで国展に出品した。31年渡仏して37年にはパリ日本美術家協会を設立する。第二次世界大戦中もパリに滞在し、ロマン・ロランをはじめ多くの文学者、美術家と交遊、その彫像を制作している。57年帰国、新制作協会会員となった。文筆でも活躍し、訳著書が多い<sup>20</sup>。

※加藤との関係…フランス滞在中に交友を持つ

● 朝吹登水子（1917-2005）…小説家、翻訳家。

戦前、戦後とパリ大などに留学をかさね、フランス文化にしたしむ。サガン「悲しみよこんにちは」、ポーボワール「娘時代」などの翻訳、紹介で知られた。平成12年フランスのレジオン・ドヌール勲章を受章。東京出身。女子学習院中退。本名は登水。著作はほかに自伝的小説「愛のむこう側」、エッセイ「パリの男たち」など<sup>21</sup>。

※加藤との関係…パリ滞在中に会って以降、サルトルを紹介してもらうなど、交友をもつ<sup>22</sup>。

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

- ・「高田氏に私の負うところは実に大きい」…彫刻を通じた「中世」の発見につながる<sup>23</sup>

<sup>17</sup> 『追悼萩原徹』萩原智恵子（1985）241-243頁

<sup>18</sup> 加藤周一「パリ、ベルン、オッタワ、そして再びパリ」『追悼萩原徹』萩原智恵子（1985）63-65頁

<sup>19</sup> 朝吹登水子「ちょっとキザな萩原さん」『追悼萩原徹』萩原智恵子（1985）138頁

<sup>20</sup> 三木多聞「高田博厚」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照2024-02-15)

<sup>21</sup> 「あさぶき-とみこ【朝吹登水子】」『日本人名大辞典』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照2024-02-15)

<sup>22</sup> 加藤周一「朝吹登水子」『高原好日』（2009）66-68頁

<sup>23</sup> 「高田氏は、その全存在をかけて、いつも同じひとつのことをいっていたように、私には思われる。文化と



・小説『運命』に出てくる人物「白木」のモデルか？<sup>24</sup>

③ 加藤周一の人生における意義

- ・萩原、朝吹…その後も加藤との交友が続く
- ・高田…『高田博厚著作集 I』の解説を加藤が執筆、  
2002年に「中原中也の会」で講演（「中原中也と高田博厚」）  
※フランスから帰国後の具体的な交友関係は？

第8段落（旧版52-54頁、新版60頁）

「日本館」に住んでいた間、私パリ大学の医学部に通っていた。主任教授は白髪の老人で教室員を従えて病室を廻りながら—その様子は東京の大学病院と少しも変らなかった—病室で談たまたま天下国家に及ぶことも少くなかった。あるとき突然私の方を向いて、「君は朝鮮の米軍が細菌兵器を使っていると思うか」といったことがある。朝鮮戦争たけなわの頃で、「そんなことはわからない」と私が答えると、「使っているかもしれないと私は思う」と教授は断言した。また外来で若い婦人の患者が裸になったときに、「あつ、何という見事な胸であるか」などといったりした。そういう冗談は、東京では考えにくい。しかし医学そのものについては、東京とパリとの間に根本的なちがいのあるはずがなかったし、事実それはなかったとってよいだろう。学会での議論のし方はちがっていた、研究室の人員の構成もちがひ、研究の題目のとりあげ方についても、いくらかフランス流の癖があったかもしれない。しかしそういうことは根本的な問題ではない。私が東京とパリとの根本的なちがひを感じたのは、病院と研究室の外においてであった。道の両側にならんだ石造の建物は、重く堅固で、あたかもパリの街全体が一個の複雑な彫刻であるかのような印象をあたえた。その石の構造との対照において、並木の緑は、鮮かにひきたってみえ、建物と建物との間に細く切りとられた灰色の空の一片さえも、あの広く開けた東京の空とは別のし方で、しかしそれ以上に強く私をひきつけた。「日本館」の頃の私は好んでパリの街のなかを歩いていた—私がそれまで生きていた空間とは全く別の空間がそこにあり、その空間の秩序は、いつまでみても倦まないものであった。何の用もないのに、何故あれほどながく街のなかを歩き廻ったのか—今から思い返して、その理由を説明することはむずかしい。たしかに私は都市計画に興味をもっていたのではない。また名所旧蹟に興味をもっていたのでもない。私はナポレオンの墓をみたことさえもなかった。ヴォージュの広場にヴィクトル・ユゴーが、またはフュルステンベルの広場にドラクロワが、住んでいたことがあろうとなかろうと、そんなことはそれらの広場の私にとっての意味を変えるものではなかった。

① 作品内世界での出来事の事実考証

- 渡仏中の加藤…パリ大学医学部に在籍
- 「主任教授」…不明

は「形」であり、「形」とは外在化された精神であって、精神は自己を外在化することにより、またそのことのみによって、自己を実現できるものだという。——私が高田博厚氏に負っているのは、何処にどういう中世建築または彫刻の傑作があるとかいう知識ではない。（……）私が私なりに造形的な世界と文化全体とのきり話せぬ関係に、ある決定的なし方で思い到ったが、高田氏はそういうことを、いわば身をもって証言していたのだ。」『羊の歌：わが回想 続』（1968）82-83頁

<sup>24</sup> 海老坂武『加藤周一』岩波書店（2013）105頁

・しかし、同様の会話はあったらしい<sup>25</sup>

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

・メインの論点…東京とパリの違い

① パリ大学医学部の主任教授との会話

何気ない会話の中で社会（朝鮮戦争）に対して自身の見解を問う

↔

東京帝国大学の「医学教室」

当時の社会について言うことは憚られる

例：「内科教室」

② 街並み…「私が東京とパリとの根本的なちがいを感じたのは、病院と研究室の外においてであった。」

・街を構造的に比較する

「道の両側にならんだ石造の建物は、重く堅固で、あたかもパリの街全体が一個の複雑な彫刻であるかのような印象をあたえた。その石の構造との対照において、並木の緑は、鮮かにひきたってみえ、建物と建物との間に細く切りとられた灰色の空の一片さえも、あの広く開けた東京の空とは別のし方で、しかしそれ以上に強く私をひきつけた。」

・街並みの構造そのもの（かたち）への注目（人ではない）↔都市計画、旧蹟（人が関与する）

③ 加藤周一の人生における意義

・空間への関心のはじまり…『日本文化の時間と空間』へ

第9段落（旧版54頁、新版61-62頁）

おそらく私はそこに一外在化された、すなわち感覚的対象と化した一個の文化の核心をみていたのだろう、としかいうことができない。その核心は、おそらく一二世紀の頃から確かなつながりをもって今日まで生きてきていたにちがいない。ということは、一二世紀以来の建物が、その後の各時代を代表する建物と共に、パリ市の中心部にのこっていた、というだけの意味ではない。そうではなくて、一二、三世紀の教会建築の私にあたえた印象が、セーヌ兩岸の街の印象と無縁ではなかった、という意味である。そのどちらにも、私は、何らかの内的衝動を感覚的秩序のなかに外在化しようとする強い意志の発現を感じた。それは東京で私が嘗て一度も感じたことのない経験である。私は街を歩きながら、底知れぬ一つの世界へ自分がひきこまれてゆくのを感じるがあった。何が私におこりつつあったのか。—それを見極めることは、研究室の仕事よりも、さしあたりの急務であるかのように私には思われた。

① 作品内世界での出来事の実事考証

・その時代の文化を代表する存在として建築に注目

例：『ある旅行者の思想：西洋見物始末記』（1955）

<sup>25</sup> 「なかには病気の話だけでなく、脱線して人事一般を論じ、また時には話の都合で政治に及ぶ教授があった。私は日本ではそういう先生に出会ったことはない。フランスでは出会ったが、一人である。それがフランス気質であるかどうかはわからないが、とにかく話はおもしろかった。」

加藤周一「フランスの医者気質」『文芸春秋』33巻11号（1955）40頁

カトリックの普遍性の象徴としてゴシック建築をみる<sup>26</sup>

※『戦後のフランス—私の見たフランス』（1952）には類似する記述なし

→「中世」を発見した後だからこそその記述

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

・8段落目の文章を抽象的に表現

・「私は街を歩きながら、底知れぬ一つの世界へ自分がひきこまれてゆくを感じるがあった。何が私におこりつつあったのか。—それを見極めることは、研究室の仕事よりも、さしあたりの急務であるかのように私には思われた。」

→街から受ける印象と、それによる自身の変化への注目

③ 加藤周一の人生における意義

・内的衝動の表現として、建築を見る…後に、高田博厚との交友を背景に、ゴシック建築を通じて「中世」を発見する（「中世」の章、参照）

・建築様式、街への興味…日本文化の空間への興味、『日本文化の時間と空間』へ

第10段落（旧版54-55頁、新版62頁）

私は日本人に会うためにわざわざパリまで出向いたのではなかった。しかし行ってみると、東京ではおそらく会うこともなかったろう同胞に出会うことが、愉しみの一つになった。殊に「日本館」の住人のなかには、一藝に秀でた人が多かった。私は作曲家と音楽会へ行くこともあり、数学者から数の秩序の「美しさ」について話を聞くこともあった。しかしまた誰にも共通していたのは、事毎に東京とパリとを比較して考える習慣であったろう。日本国の状況と比較する対象として、フランス以外のどういう国も知らなかったからであり、またそのフランスについても、一般化を困難にするような多くの具体的な事例を知らなかったからにちがいない。経済的には、誰も、何らかの意味で日本とのつながりに頼って暮らしていた。生理的には、誰も、女に飢えていた—ろうと思う。私もまたその例外ではなかった。私はまもなく「日本館」を去る必要を感じるようになった。

① 作品内世界での出来事の実事考証

・作曲家…別宮貞雄

留学前から〈さくら横ちょう〉を通じて交友を持ち、加藤と同時期にフランスに留学<sup>27</sup>

・数学者…不明

・「誰にも共通していたのは、事毎に東京とパリとを比較して考える習慣であったろう。」

→他の留学生にも共通する

例：矢代秋雄…フランスで学んだこととして、幸田露伴『五重塔』や長谷川如是閑のような「江戸時代的・封建的職人氣質」ではなく、勤勉かつ個人主義に基づくフランス的な「職人氣質」を学ぶ<sup>28</sup>

→フランス（パリ）で学んだことを説明するために、「日本」を比較対象とする

<sup>26</sup> 加藤周一「ランスのカテドラル」『ある旅行者の思想：西洋見物始末記』（1955）137-138頁

<sup>27</sup> 西澤忠志「史料紹介：加藤周一文庫における「音楽」関連史資料について 付—加藤周一宛別宮貞雄書簡」『関西美学音楽学論叢』7号（2023）

<sup>28</sup> 矢代秋雄「留学とは」『音楽留学生』音楽之友社（1957）241-242頁

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

・「日本国の状況と比較する対象として、フランス以外のどういう国も知らなかったからであり、またそのフランスについても、一般化を困難にするような多くの具体的な事例を知らなかったからにちがいない。経済的には、誰も、何らかの意味で日本とのつながりに頼って暮っていた。生理的には、誰も、女に飢えていた一ろうと思う。」

→当時の加藤の状況？

フランス（日本館）を中心とする、『西日本新聞』などへの寄稿を収入源とする

→フランスをより知るために、「日本館」を去った？